31

江戸期の経穴学工具書について

天野　陽介，小林　健二，石野　尚吾，花輪　壽彦
北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部

1. はじめに

鍼灸の分野，特に経穴に関する内容は，『黄帝明堂経』『甲乙経』『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『銅人腧穴鍼灸図経』など種々の書籍に収録されている．しかし，その記述には多くの異同があり，検討を要する部分が散見する．したがって，各種の経穴書を比較検討する必要があり，そのため経穴に関する索引や目録が必須の工具書となる．今回，江戸期の工具書的な経穴書を検討したので報告する．

2. 方法

以下6冊の体例，収録経穴数，引用書と引用数について検討した．

①『穴名備考』1756刊，竹田景淳著，以下①
②『挨穴捷径』1761刊，杉原敦著，以下②
③『経穴類彙』写本・京大付属図書館蔵，百々漢陰著，以下③
④『経絡以呂波分』写本・京大富士川文庫蔵，関口東園著，以下④
⑤『穴名捜捷』写本・京大富士川文庫蔵，藍川慎著，以下⑤
⑥『経穴彙解』1803年自序，原南陽著，以下⑥

3. 結果

〔体例〕経穴記載の配列については，①②③④はイロハ順で検索に便利に編集されていた．⑤は画数順に配列され，見出し漢字が同じものでは経絡順に編集されていた．この経絡順では，②が筆頭の経絡を任脈，督脈にしているのが特徴的であった．⑥は『甲乙経』巻三の経絡順に配列されていた．

①③⑤は経穴を正名，別名，奇穴の3つに分類整理してあるのが特徴であった．正名は，手の太陰肺経からはじまる経絡順に統一的に配置され，所属経絡名が記載されていた．

穴名の見出し読みに関しては，各書いくつかの相違が見られた．例えば「維道」穴を①は「イ」に配属し，②は「ユ」に配属させていた．ここから，当時の「維道」穴の読みにはイドウとユイドウの二通りあったことがわかった．

⑥は経穴の索引的要素はなかった．

〔収録経穴数〕①正穴354，別名337，奇穴273．②正穴346，別名0，奇穴10．③正穴351，別名169，奇穴0．④正穴351，別名0，奇穴0．⑤（現在検討中）．⑥正穴356，別名319，奇穴297．

〔引用書と引用数〕①80種，609回．②8種，17回．③5種，5回．④18種，50回．⑤（現在検討中）．⑥63種，972回．

①⑤⑥は収録経穴・引用書ともに充実していた．特に⑤は引用書の巻数，引用内容までも備えていた．この書は収録内容が膨大なため，現在検討作業を続行中である．

〔経穴部位表記〕①は正穴に部位表記が無かった．②は堀流の十二支尺寸法を採用していた．③④は経穴部位に『類経』を採用，⑤⑥は『甲乙経』を採用していた．また，奇穴は全ての書に出典と部位表記があった．

4. 考察

江戸期の経穴書の中には検索に配慮し，また記載内容の出典を明記した工具書的性格を有する書があることが分かった．今回検討した中では，藍川慎『穴名捜捷』と原南陽『経穴彙解』が量質ともに秀でていた．

このような経穴書が編纂された背景には次の理由が考えられる．一般的な経穴書における経穴の記載は，経脈流注順，部位別，手足の陰陽経別の経脈流注順などであり，『千金方』のように経穴・奇穴が散在している書もある．また，経穴によっては異名が多数存在し，検索に困難なこともある．そこで，知りたい経穴の所属経絡や出典が分かり，かつ検索に容易な書が編纂されたと考えられる．

5. 結語

特定のテーマに沿ったデータを集めて管理し，容易に検索・抽出など再利用できるようにしたものをデータベースという．歴史に立脚した経穴学を構築するためには，江戸期の経穴書に加え，『太素』『医心方』『聖恵方』などの善本資料を用いた経穴資料データベース作成が急務であろう．